

企画事業「主体性、社会性を育むための体験活動等事業」

事業名	第36回無人島に挑む全国青年の集い	
実施期	平成21年8月1日(土)～5日(水)	
担当者	企画指導専門職 中村 元	

I 事業の趣旨

情報化や少子化等の社会の変化を背景に、青少年の課題に体験不足や対人関係の希薄さ等が挙げられて久しい。これらの課題は、不登校やニート、フリーター等の要因にも顕著に表れ、青少年の主体性や意欲、社会性の低下等の課題と密接に関連している。

これらの青少年の課題に対して、無人島のフィールドを活かした自然体験活動を展開し、青少年の主体性や社会性、達成感や自己肯定感を高める気づきの場を提供する。

II 事業の概要

1 事業の目的

青少年の課題を踏まえ青年期の若者に対象を絞り、「無人島における長期の自然体験や集団生活を通して、青年の意欲を高め、自立を促すこと」を目的に事業を企画する。特に、「チームサバイバル・仲間と共に三不を乗り越える！」をコンセプトに掲げ、青年が人間関係を深めコミュニケーション能力を高めることに主眼を置き、プログラムを展開する。

日常生活から離れ、無人島の“三不（不便・不足・不自由）”の自然環境に対して、自分の意見を伝え、チームでの合意を図り、仲間と共に乗り越えた時に、青年たちが何を感じるのか、チームの成長・成熟や個々の成長の発見を支援する。



【野外活動の基礎・ロープワーク】

2 参加対象及び募集人員

全国の高校生以上の青年を30人募集する。

3 参加状況

男性 8名、女性 9名
 高校生（県内）・・・5人
 大学生（県内）・・・1人
 大学生（県外）・・・8人
 北陸・・・1人
 関東・・・4人
 関西・・・2人
 山陽・・・1人
 社会人（県内）・・・1人
 社会人（県外）・・・2人

4 事業内容

(1)プログラムデザイン

7日間にはそれぞれテーマを設け、潮位等の自然条件やフィールドの特性を活かし、事業の目的を達成するために流れのあるプログラムデザインを行った。

1日目 野外活動の基礎
 2日目 野外活動の基礎、無人島出発
 3日目 無人島生活
 4日目 無人島生活
 5日目 無人島生活、ソロ（個人）活動
 6日目 無人島生活、感謝祭
 7日目 無人島撤収、ふりかえり



【大型カヌー遠漕】

初日から3日目までは、無人島生活のスキルを講師陣から学び取り、その後、徐々にチームが独立して協働で無人島生活を営む。また、無

人島生活5日目には、1人で無人島の夜を過ごし、これまでの無人島生活や日常の生活をふりかえる。そして、無人島の最後の夜は、チームの仲間や無人島の自然に感謝しわかちあう集いを実施する。

(2) 事業経過

事業実施前から期間中において、多数の熱帯低気圧の発生や迷走した台風8号の影響を受け、事業のプログラムの変更や中止、短縮を余儀なくされた。

- 1日目 野外活動の基礎
- 2日目 大型カヌー遠漕（無人島往復）
- 3日目 無人島生活（生活基盤作り）
- 4日目 無人島撤収
- 5日目 ふりかえり、那覇泊港へ

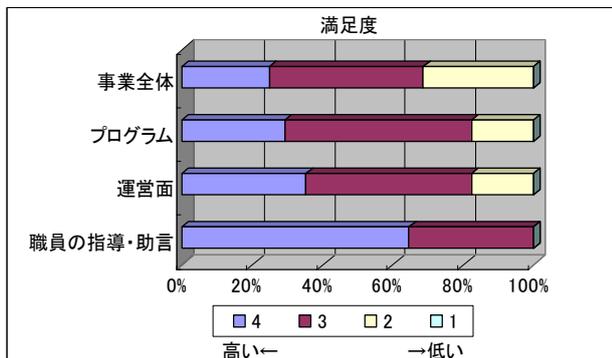
5 実施上の留意事項

- (1) 多くのスタッフが係わる事業であるため、ねらいや目的の共有を図り、事業運営の方針や体制作りを明確にする。
- (2) 参加者の健康面・安全面を最優先に配慮し事業を展開するために、毎日の参加者の健康観察やふりかえりシートを活用、講師陣との情報交換の場を設定する。
- (3) 数時間毎の気象情報を入手し、必要に応じて事業の展開に関するスタッフミーティングを実施する。

6 アンケート結果

事業の満足度を調査するために実施したアンケート結果は以下の通りである。

満足度は「職員の指導・助言」以外の項目で、6割から8割弱となった。台風などの悪天候によるプログラムの変更や中止が第一の要因だと考えられる。



自由記述には、仲間や自然への感謝の言葉が多く寄せられ、単なる無人島でのサバイバル体験ではなく、人とのふれ合い、仲間と共有した時間を大切に感じ、これからの生活への希望や課題が表れている。

(1) 自分自身の課題の達成（一部抜粋）

・楽しく過ごすことが課題だったか、楽しめた。暑い中、無人島について、重い荷物を運んだりした時も、辛いこときついことを楽しめるようになった。

・三不をグループの人たちと協力して乗り越えることができたし、無人島での生活で自然のありがたさを強く感じる事ができました。

・自分自身の欠点を見つける事ができた。しかし、この期間中には改善できなかったように感じる。明日から、改善できるように努力したい。

(2) 自分自身の変化（一部抜粋）

・現代社会に生きていて、とても不便とは考えられそうになりました。そして、仲間、人と協力しないと生きていけないと感じました。

・集団生活って本当に大変。職場という集団の考え方、見方も変わりそうな気がする。

・人への接し方が良い方向に多少変わったような気がします。自分でやるべきことを見つける力が身についた。



【無人島での食材確保】

Ⅲ 成果と課題

1 事業の成果

参加者の志望動機は、無人島の自然や生活への関心はもちろんであるが、自己発見や自分への挑戦、人間関係能力の向上などの動機が多かった。実際に、サブテーマに掲げた本事業のコンセプトの“チームサバイバル”や“仲間と共に乗り越える”というキーワードに惹かれたことを参加者は口々にしており、参加者集団全体のニーズとして捉えることができる。

このような背景やアンケートを踏まえ、以下の成果が挙げられる。

- (1) 参加者の主体性や積極性を引き出すことができ、達成感や自己肯定感を得る機会となった。
- (2) 参加者間のコミュニケーションを深め、人間関係能力を高め、社会性を培う機会となった。
- (3) 参加者自身が自己を見つめ、課題を見つける機会となり、日常生活の変容が期待できる。

2 今後の課題

- (1) 事業関係者間で、事業のねらい・目的を明確にし、気象状況を見極め、体制を整え、参加者の安全への配慮を優先することの共有を徹底する。
- (2) 無人島（儀志布島）をベースキャンプとして、ライフラインの確保や荒天時の代替プログラムの選択肢の充実を図る。
- (3) 当事業の教育効果の検証や成果の情報発信、事業の広報等の強化が必要である。